
前途多難な見習いサンタ

星見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前途多難な見習いサンタ

【Nコード】

N2479D

【作者名】

星見

【あらすじ】

サンタクロースを信じますか？彼らはきつといます。ほら、聴こえませんか？サンタをのせたソリの音が

あなたはサンタクロースを信じますか？

大人は子供に夢を与え

子供はいずれ現実を知り大人になる

サンタクロースはその時共に居なくなる

夢というモノはとても儚く臆気で

時には人を活かし

時には絶望や失望の念を与える

サンタクロースはどこにいるの？

子供の無邪気な問い

サンタクロースは実在しない

大人は断言する

だけれどサンタクロースは存在する

遠い遠いどこかに

きつと存在する

「あゝさみ〜」

じやくじやくとブーツで積もりに積もった雪を踏み固めて雪のしんと降るなか歩くのは若い男。

見た目は20代前半で雪のかかった髪はオレンジに近い赤。右に1つ左に3つつけたシルバーのシンプルなピアス。少々目つきが鋭いものの整った顔立ち。簡単に客観的に要約して彼の容姿を説明すると『若いチャラチャラした感じのちょっとガラが悪い男』というところか。

一面雪に覆われたこの場所に幾つか佇む建物。彼はその1つである無駄にデカい変わった形の小屋（デカいのに小屋って変な話だな）の前にたどり着き、荒々しく入口横にあるパネルを押して開口した。

中は暖房完備で非常に快適。外観な反して清潔で気をふんだんに使ったある意味豪華な造りだ。

男は入口で頭や服にかかった雪をはらいおとし、中へ向かう。

真っ直ぐに続く廊下の両サイドに幾つかの小部屋があり、ある意味馬小屋にも見えるがそれにしては非常識なほどハイテクな機器が完備されていた。

男は真っ直ぐに廊下を進む。そして一番奥にある他と比べて格段に

豪華な扉の前で止まった。扉の横にはやはりパネルが設置されており、男は暫し躊躇したようだが扉を開ける操作をした。

キィィンと機械音がして扉が床に吸い込まれりように開く。

「おや？また来たのかい緋兎」

開け放たれた扉の奥から妙に威厳のある、それでいてかなり嫌みをこめた声が響いた。

「うるさいだまれトナカイ鍋にして食うぞ」

その声に露骨に怒りを露わにした顔をつくり、緋兎と呼ばれた男はずかずかと部屋に入っていた。

部屋は明るく、空調及び照明、家電一式の揃えられたこれまた豪華なものだ。

そしてその奥に部屋の主は居た。歴史を感じさせる堂々たる体躯、幾重にも枝分かれした鋭い角、そしてなにより特徴的なのは赤く輝く鼻。それがこの部屋の主である老練のトナカイの姿だ。

「赤諮。サツサときやがれ」

堂々たる風格のトナカイを赤諮と呼んだ男は彼の前に真っ赤な綱をぶら下げた。

「前も言ったが、緋兎。私はキミを認めていないんだ。私は自分が認めた“サンタクロース”以外に使われるつもりはない」

キツパリと言い放った赤諮に緋兎はさらに顔を顔を強ばらせる。

「てめえ…いつまで俺をガキ扱いしやがる。20だぞ俺は！」

「年齢なんてどうだっていいんだよ。緋兎、私はキミがまだ一人前にはなっていないと思う。だからまだダメだ」

「じゃあ聞くが、俺のどこがダメだっていうんだ!？」

「それはキミ自身が考えることだよ。ただ、この分だと今年も蒼季が行くことになりそうだね」

言いたいだけ言って赤諮は瞳を深く閉じて眠りだした。もはや緋兎がなにを言っても無意味だろう。

「ああ〜クソ!このジジイ!」

悪態をついた緋兎は仕方なく“仕事場”に帰ることにした。

「師匠、なんなんだアイツ!」

サンタクロースの仕事場の1つ、プレゼント工場の片隅にある休憩室で椅子にどっかり座りこんだ緋兎は自身の師匠に向かってあのトナカイに対するグチを言い連ねていた。

彼は此处で“サンタクロース”になるために修行している身であり、サンタは確かに存在している。

「赤諮は少し頑固だからね。気長にやらないと」

ドリップコーヒを淹れながら宥めるように言ったのが緋兎の師匠である蒼季だ。名前の通り蒼い髪をした壮年の男であり、弟子とは対極にとっても穏やかな顔をしている。

「だいたい何がダメなんだ。プレゼント作りや煙突からの侵入、窓開けからピッキングだって数十秒で完璧に証拠を残さずできるってのに」

「何も知らない人が聴いたら泥棒みたいだね」

苦笑混じりの困った笑顔を浮かべた蒼季は先ほど淹れたコーヒのマグカップを緋兎に渡して自身も手近な椅子に腰掛けた。

「サンタも泥棒も似たようなもんです。盗ってくか置いてくかの違いで」

「身もふたもないな……」

「……あゝ、思い出すと腹たつ！」

「落ち着きなさい。それより、配達先のリストは出来たのかな？」

「……………」

「はあ……」

師匠は弟子の極端さに悩まされる。この弟子は実技ならば文句なしの一級品の實力を持っているのに、他の雑務は直ぐにサボる。

「直ぐにやりなさい」

「……了解」

カタカタとキーボードを叩く音だけが部屋に響く。此処は情報処理室。各地から集められた様々な情報が部屋に置かれている様々な電子機器にたたき込まれていく。

田所	郁	×
木村	愛	×
笹本	雪野	
志村	健吾	×
鈴木	宏典	
小淵	宗	

釘宮 飛鳥 x

液晶に並ぶ子供たちの名前。 xがついているがこれはサンタクロースを信じなくなった証だ。

サンタクロースのプレゼントは信じている子供にしかあげない。何故かと訊かれては困るが、そう決まっている。サンタクロースの間では暗黙のルールだ。逆を言ってしまうえばサンタクロースを信じていれば大人にもプレゼントを配るが、そんな人間はまず居ない。

「つーか最近の子供はやけに冷めてるな。まったく、年々減少傾向かよ……」

ばやきながらも緋兎は作業を続けていく。プレゼントを配る子供を選別し、どんなプレゼントがいいかを調べさせる。どうやって調べるかは企業秘密だ。

「今年はすくねえな……ガキの数が減ってこぎたねえオヤジどもが増えやがつてるからなあ……」

もはや悪態や愚痴というより、日本に対する不満だった。

ジングルベル
ジングルベル
鈴がなる〜

「……つと、電話だ」

着ったがポケットから溢れ出し、緋兎は作業を中断して携帯を取り

出す。

「もしもし？」

『もしもし緋兔。ソリの訓練どうするんだ？』

師匠からの電話だった。

「あゝ…わかりました。直ぐ行くんで…了解」

呼び出しを断るわけにはいかず、緋兔はパソコンを落として部屋を出た。

「九祇太、コッチにこい」

厚手のジャケットと頑丈な手袋、雪を入れないブーツを装備した緋兔は赤い手綱を持ち九祇太の鞍にくくりつける。九祇太はとても大人しく、気性が優しいトナカイだ。

「よし、頼むぜ九祇太」

手綱をソリに繋げて緋兔が九祇太の頭や顎を撫でてやると嬉しそうに九祇太は顔をほころばせた。

サンタクロースにとって必須ともいえるトナカイのソリ。クリスマス当日だったら何匹もつけなければいけないが訓練なので一匹だけだ。

トナカイたちは先頭を走るトナカイについて走る。つまりは先頭を操りこなせばソリは言うことをきかないのだ。

そして、先頭を走るのは赤く輝く鼻をもつ赤谿であり、ゆえに緋兎はまだ本番を経験していない。

「クリスマスまであと2ヶ月。ぜってえあいつに認めさせてやる」

若いサンタクロースは鞭をとる。といってもこの鞭は先端がライトになっていて光で指示を出すものだ。

「九祇太、スタートだ」

緋兎の合図と共にソリは走りだした。

若いサンタが一人前として認められるのが先か、クリスマスが来るのが先なのか。とにかく若いサンタクロースはがむしゃらに走り出す。彼は一人前のサンタクロースになれるのか

「大丈夫かな……」

この師匠の言葉の後、弟子は見事にソリから放り出されたりされなかったり……

「まだまだ前途多難だな」

世界には知られていないが確かにサンタクロースは存在する。

サンタクロースになるためにがむしゃらに努力する青年。

人語を解する赤鼻のトナカイ。

世界のどこかにあるサンタクロースたちの住処。

ほら、聴こえないかい？

サンタクロースをのせたソリの音が

e n d

（後書き）

いかがでしたか？見習いサンタクロースのお話。考えてみればサンタクロースって結構キツイ仕事ですし、あまりおじいちゃんだとしんどいかなあと思い、師匠を少し若返らせました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2479d/>

前途多難な見習いサンタ

2010年10月17日02時42分発行